

イゾルデが歌う「愛の死」は 「愛に死はない」と歌っているのです。

2022/08/18



ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》は3幕仕立てです。その最終幕の第3幕の最後で、イゾルデが一人で歌う詠唱によって全曲の幕が静かに降ります。この詠唱を「愛の死」といいます — が、しかし、だれがこの歌を「愛の死」と名付けたのかは不明です。ワーグナーの総譜にはそう書かれていません。また、この詠唱の中にも「愛の死」という言葉は出てきません。でも、昔からこの詠唱を、だれもが「愛の死」と言っただけではありません。おかしいことです。それで、「『愛の死』とはなにか？」という、この言葉に対する解釈への疑問がいまだに起きています。

「愛の死」とは、愛の陶酔が醒めるのを妨げる優しい死のこと

この「愛の死」(lievestod)という言葉が出てくるのは、第2幕でトリスタンとイゾルデが歌う二重唱です。このとき、ただ一度だけです。 [資料60頁]

二人

ああ、永遠の夜、たのしい夜！
気高く尊い愛の夜！
おまえにいだかれて、
おまえにはほえまれては、
だれが、目ざめるとき
不安を覚えずにいられますか？
さあ、その不安を追いはらっておくれ。
やさしい死よ、
あこがれ求める **愛の死** よ。
おまえにいだかれ、おまえにささげられ、
古くからの清い熱につつまれて、
ああ、目ざめる苦しさから
解きはなされたい！

O ew'ge Nacht, susse Nacht!
Hehr erhabne Liebesnacht!
Wen du umfängen,
wem du gelacht,
wie wär' ohne Bangen
aus dir er je erwacht?
Nun banne das Bangen,
holder Tod,
sehnd verlangter **Liebestod!**
In deinen Armen,
dir geweiht,
ur-heilig Erwärmen,
von Erwachens Not befreit!

トリスタンも、イゾルデも、いま愛しあっているこの夜の陶酔が醒めないで欲しいと願っているのです。このまま死ぬことを願っているのです。目覚めるのが怖いのです。「やさしい死がやって来て、目覚める不安を追い払って欲しい」と願っているのです。「愛したままで死んで行く」 — それを「愛の死」と言っているのです。「愛が死ぬ」のでも、「愛という名の死」でもありません。愛したままで死なせてくれる「愛の果ての死」なのです。

永遠に、「トリスタンとイゾルデ」

でも、終幕でイゾルデが歌う詠唱では、この「愛したままで死んで行く」などとは、あからさまに言っていません。イゾルデは、死んでしまったトリスタンを抱きかかえながら、まだ、生きてると信じているのです。それで、イゾルデは私たちに、「トリスタンが、目を開けて微笑んでいます。トリスタンが生きて、空高く昇っていくのを見なさい」と言うのです。永遠に二人は、「トリスタンとイゾルデ」なのです。「どちらかが死んでも、二人の愛はまだ、生きています」 — それを言うために、トリスタンが死んだ最後の最後で、イゾルデはこの歌を歌うのです。[資料78頁]

イゾルデ

おだやかに静かにあの方がほほえんで、
目をやさしくあけているのが、あなたには見えませんか？
しだいに明るく輝きをまして、
星の光につつまれながら空高くのぼっていくのが、
あなたには見えませんか？

そしてまた、イゾルデは、「唇からは楽しくおだやかにこころよい息が静かにかよっているのに、あなたには、それが感じられないのですか？ 見えないのでですか？ 私だけにあの方の息の調べが聞こえるのです」と生きていることを私たちに強調します。この終幕のイゾルデの歌は、「トリスタンは未だ生きていて、イゾルデと一緒にいるのだ」と歌っているのです。なにも、「愛の死」などと言っているではありません。「トリスタンとイゾルデは、このように、トリスタンが死んでもなお、生きて愛し合っているのだ」というの

です。そうです、未だに、「トリスタンとイゾルデ」なのです。そこで思い出すが、第2幕の二重唱が始まる前に二人が語り合った、「トリスタンとイゾルデ」という「— と —」についてです。この「トリスタンとイゾルデ」という二人だけの至福の愛は、二人が活着ている間はつづくのですが、「もしどちらかが死んだら、この『トリスタンとイゾルデ』という言葉もなくなるのでしょうか？」とイゾルデは不安を覚えます。[資料57頁]

イゾルデ

でも、私たちの愛は、「トリスタンとイゾルデ」(Tristan und Isolde) っというでしょう？ ころよこの（「と」という）言葉。

ああ、この言葉が結ぶ愛のきずなは、トリスタンが死ねば、その死のためにイゾルデは切り離されはしませんか？

トリスタンが死んでも「トリスタンとイゾルデ」の愛

この不安を最初に持ちだしたのは、トリスタンでした。このイゾルデの不安の前にトリスタンはいいます —

トリスタン

私たちの愛ですって？ それはトリスタンの愛ですか？

それとも、あなたと私の愛ですか？ イゾルデの愛ですか？

ああ、死がうちかかってくるときに、愛が死から逃れることができるでしょうか？

力強い死が私の前に立って、私の身体や生命をおびやかすとき、それらを私はよろこんで愛の手にゆだねるけれども、愛そのものに、死のはたらきもどうして手がとどきましようか。よろこんで生命をささげ、いま死んでいっても、どうして愛までが私と一緒に死ぬでしょうか？

永遠に生きる愛がどうしていっしょに終るでしょうか？

しかし、愛がけって死なないならば、どうしてトリスタンも、その愛ゆえに死ぬことがあるでしょうか？

イゾルデが、「私たちの愛」というとき、トリスタンは念を押します — 「それは、あなたと私の愛ですか？」。ここで、トリスタンはなにをいっているのでしょうか？ イゾルデが「私たちの愛」というとき、それは、「トリスタンとイゾルデ、二人の愛」のことです。もし、死がトリスタンを襲っても、トリスタンは、「自分の身体や生命を愛にゆだねるので、私が死んでも愛は決して死なない」というのです。ですから、「トリスタンが死んでも、『トリスタンとイゾルデの愛』はなくなる」と言っているのです。それで、イゾルデは安心するのです。その確信の許に、イゾルデはそのことを結論として歌おうとするのですが、突然のマルケ王の出現で最後まで歌うことが出来ません。それで、終幕の最後の最後になってようやく、「おだやかに静かにあの方がほほえんで、目をやさしくあけているのが、私には見えますが、あなたには見えませんか？」と歌うことができたのです。ですから、このイゾルデの最後の詠唱は、「愛の死」ではなくて、「トリスタンが死んでも、まだ、『トリスタンとイゾルデ』の愛は活着ているのだから、『愛の死』などと言うものはない」と歌っているのです。愛したままで死なせてくれる「愛の果ての死」なのです。ですから、この最後のイゾルデの詠唱を、「愛の死」という誤解を招く言い方は間違いです。

愛に、死などは、ない。

イゾルデが歌う「愛の死」は、トリスタンが死んだので、「二人の愛の死」を歌うのではなく、「愛に死などはない」と確信をもって歌っているのです。

イゾルデは一人、恍惚となって歌います —

イゾルデ

私だけにあの方の息の調べが聞こえるのです。

その調べは、静かによるこびを訴え、すべてを語りながら、やさしく慰めるように、あの方から響き出て、私の中へはいり、高く舞い、やさしい音で私のまわりに響いています。

それよりも冴えた響きで私をめぐってただようのは、おだやかな風なのでしょうか？

よろこびのかおりの波なのでしょうか？

それらのさざ波が高まって、

私のまわりにうちよせるのを私は息を吸いながら、

耳をすましていけばいいのでしょうか？

それとも、そこえ身を沈めればいいのでしょうか？

かおりの中に心地よく、息を吐ききったらいいのでしょうか？

この高まる波の中に、高なる響きの中に、

世界の息のかようすべてのの中に、おぼれ、沈んで、われを忘れる。

ああ、この上ないよろこび！

ワーグナーがこの楽劇《トリスタンとイゾルデ》を書いたのは、トリスタンとイゾルデという愛し合う二人の愛を、ただ描いたのではなくて、「真の愛は死なない」というワーグナーが「理想とする愛の真実」を描いたのです。従って、トリスタンとイゾルデの愛は、「永遠に死なない愛」だったのです。

《トリスタン》は「継母物語」

さて、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》を見終わったとき、「このオペラは、物語として、一体、どのジャンルに入るのだろうか？」と思いました。

世に言われるように、《トリスタンとイゾルデ》は、「ロメオとジュリエット」と同じ「悲恋物語」です。どうにもならない、仇同士の家生まれたロメオとジュリエットは、最初から不幸な運命が定められた「悲劇の主人公たち」でした。でも、国王の王妃とその騎士の愛である《トリスタンとイゾルデ》の物語は、この「悲恋物語」であると同時に、その枠を越えた人妻との「不倫物語」でもあります。それよりも、父親代わりに叔父の妻との恋物語ですから、一種の「継母(まはは)物語」でもあります。私はここに、改めて、「《トリスタンとイゾルデ》＝継母物語説」を提唱します。そうです、ラシーヌの『フェードル』や日本の文楽と歌舞伎でおなじみの『摂州合邦辻』(せっしゅうがっぽうがっじ)と同じ「継母物」なのです。

イゾルデは、トリスタンの叔父(母の兄)の妻ですが、叔父のマルケ王はト

リスタンの父親代わりですから、イゾルデは若い継母だといって良いでしょう。若い継母と義理の息子の恋愛関係を主題とした「継母物語」は、古今東西名作が多く、フランスではラシーヌの『フェードル』がありますが、日本では、文楽と歌舞伎の『摂州合邦辻』があります。《トリスタンとイゾルデ》の物語も、これらの一連の「継母物語」の一つであると思うのです。

特に、『摂州合邦辻』は、継母の玉手御前(たまてごぜん)に毒酒を飲まされた義理の息子の俊徳丸(しゅんとくまる)が不治の病人にさせられるという、「媚薬」ならぬ「毒薬」がおおきな仕掛けになっているところも《トリスタン》と似ています。それにこの演目の本題は、滑川に落とした銭十文を銭五十文で買った松明で探させる話で有名な鎌倉時代の武士青砥藤綱(あとおとふじつな)家にまつわる「お家騒動」なのですから、その時代の歴史が絡んできます。《指環》とも比べられる壮大な一大叙事詩でもあります。そのことについては、また、稿を改めて……。

[2022/08/18 都築正道]